

令和 2 年 9 月 15 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04353

研究課題名(和文) 周産期から乳幼児期早期の臨床心理学的支援モデルの構築

研究課題名(英文) Construction of clinical psychological support model- from perinatal to early childhood

研究代表者

永田 雅子(Nagata, Masako)

名古屋大学・心の発達支援研究実践センター・教授

研究者番号：20467260

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、周産期から乳幼児期早期の臨床心理的支援の在り方を検討することを目的としている。医療や社会の進歩に伴い生じてきている心理的課題の現状の分析と、新生児期～乳幼児期早期の親のメンタルヘルス、子どもの行動特徴、親子の相互作用の検討を行った。また周産期医療領域およびフォローアップ外来における心理職の役割について検討を行った。その結果、この時期は様々な要因が心理的側面に影響しており、子どもに焦点をあてた親子の関係の支援が有効であることを明らかにした。その成果の一つとして、周産期領域で活動する臨床心理士をはじめとした心理職むけのガイドブックを作成し、研修体制の構築をすすめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

次世代の社会を担う子どもたちを安心して産み育てることができるように、妊娠～出産～子育ての一連のプロセスをどう支えていくことができるかが緊急の課題となってきた。一方で新生児期および乳幼児期早期の親と子の関係性の発達と支援方法については確立されていない。親子の相互作用の分析を行うことで周産期～乳幼児期早期の支援の在り方について提起をおこうとともに、新生児期の親子関係の支援のアプローチの一つであるNBOの日本における活用の有用性を明らかにした。これらの研究成果をもとに、NICUおよび産科医療領域で初めて活動する心理職向けのマニュアルを作成し、研修体制の構築を行った。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to research the best way of clinical psychological support from the perinatal period to the early childhood. We analyzed the current state of perinatal psychological issues that are occurring with medical and social progress. And examined the mental health of parents from neonatal to early childhood, behavioral assessment of babies, and interactions between parents and babies. We also examined the role of clinical psychologist in the perinatal medical field and follow-up outpatient care. As a result, various factors were affected psychological side at perinatal period. And it was clarified that support for the relationship between parents and babies focused on babies was effective. As one of the results of this research, we prepared a guidebook for psychological professionals, including clinical psychologists who work in the perinatal area, and constructed a training system.

研究分野：臨床心理学

キーワード：周産期 メンタルヘルス 超早期介入 家族支援

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

近年、晩婚化の影響で、初産年齢の高齢化や不妊治療での妊娠が増えてきており、出生率が低下する中、低出生体重児の出生数は年々増加し、2011年には全出生数の9.7%を占めるようになってきている。新生児集中治療室 (Neonatal Intensive Care Unit : NICU) 退院児が虐待のハイリスク群であることはこれまでも数多くの報告がされてきており (Hunter et al, 1978, 小林 2002) 周産期医療の現場では、“後遺症なき生存”から、“Family Centered Care”へとその関心が移りつつある、そうした中で、妊娠中、あるいは出生直後からの支援の体制の構築が検討されるようになってきている。

周産期医療の中での心理職の活動は、1990年代半ばに始まり、少しずつその数を増やしてきた。母親を中心とした親への心理臨床的な支援の在り方は多くの事例が報告されている (永田, 2006 など) 一方で、赤ちゃん自身と、親子の関係性の発達をどうアセスメントし支援をしていくのかについては十分な理論的な構築はされていない。

新生児期～乳児期早期の親子の関係性の検討については、周産期の親のメンタルヘルスの子どもの発達への影響 (Poobalan et al, 2007) にとどまり、親と子を一对として、出産後から縦断的に検討をしたものはなく、どういった側面に焦点を当てて支援をしていく必要があるのか十分な検討はされていない。今後、周産期医療や乳児期の支援の場において、臨床心理学的支援の専門性を確立するために、専門教育は必須であり、その基盤となるエビデンスを構築していくことが緊急の課題である。

2. 研究の目的

本研究は、周産期から乳幼児期早期の臨床心理的支援の在り方を検討することを目的として、現状の分析と、この時期に呈する心理的課題について親の要因、子どもの要因、親子のやりとりの要因、親子を取り巻く場の要因についてそれぞれ検討をおこなう。周産期～乳幼児期早期の臨床心理学的支援の在り方について、フォローアップ研究を通して明らかにするとともに、周産期医療における心理職の教育研修体制の整備を目指すものである。

3. 研究の方法

(1) 出産後の子どもの行動評価および母親のメンタルヘルスのフォローアップ研究

生まれたばかりの赤ちゃんと母親の状態は、その後の親子の関係性の発達にどういった影響を及ぼすのか、また新生児期に赤ちゃんの特性を知ってもらうことが、親子関係の形成に効果があるのかについてフォローアップ研究を行う。産後0-5日目に、Neonatal Behavior Assessment Scale (NBAS) あるいは、その短縮版である Neonatal Behavior Observation (NBO) を母子同席で行い、子どもの行動評価および母親のメンタルヘルスのデータを収集するとともに介入群、被介入群の分析を行う。子どもの行動・反応と知的発達、親のメンタルヘルス、そして母子の相互作用の質的データを生後1か月、10か月、1歳6か月と縦断的に蓄積する。早期の母子の関係性が築かれていくプロセスを親、子、親子の相互作用の3側面から検討を行うことで、臨床心理学的介入の在り方について検討を行う。

(2) 新生児期から乳幼児期早期の関係性支援のための介入方法の検討

NICUをはじめとした周産期医療で活動する心理職の活動について実態調査を行うとともに、新生児期の母子の介入の方法の一つとして、アメリカで開発された Neonatal Behavior Observation (NBO) の日本における応用可能性の検討を行う。NBOは、Nugent (2007) らが開発したもので、世界的に活用されているプラゼルトン新生児行動評価 (Neonatal Behavior Assessment Scale: NBAS) の短縮版である。NBOはより家族支援に重点を置いた早期介入方

法であり、赤ちゃんを家族と観察することで赤ちゃんのサインの読み取りを家族と共有することを目的としている。日本での報告は少なく、NICUでの導入は世界的にもほとんど報告されていない。産後およびNICU退院前の支援の一つとして導入し、事例を通して検討を行う。

(3) 関係性支援のための教育研修プログラムの構築

1)~2)の研究を踏まえ、周産期から乳幼児期早期の関係性支援のための有効な臨床心理学的教育研修プログラムを、東海地区の周産期を専門とする心理職の協力をえて検討を行い、周産期で活動を行う心理職向けの研修マニュアルの作成を行う。

4. 研究成果

(1) エディンバラ産後うつ病自己評価票(Edinburgh Postnatal Depression Scale; EPDS) (Cox, et al, 1987) の陽性率は 19.5% であり、産後直後から日数がたつにつれて EPDS 得点が高くなっていった。初産婦は経産婦にくらべ、抑うつ感が強く、育児への自信のなさが強かったが子どもに対する母親愛着は経産婦より高かった。出産後のケアでは、夫の立ち合いが抑うつ感や、子どもへの母親愛着 (Nagata, et al, 2000) にポジティブな影響を与えていることが明らかになった。母親の子どもへの母親愛着や、育児の自信のなさには、抑うつがよりかかわっているものの、母親が感じる子どもの反応性も一定程度の説明力を有していた。新生児行動評価 (NBAS) のクラスター値では母親のメンタルヘルスの各尺度との間に有意差が見られなかったため、クラスター値を 3 段階評価として分析を行った。赤ちゃんの方位反応に対する敏活さの児や追視等の反応性が強い、あるいは、穏やかながらも認められる場合は EPDS の得点が、まったく反応が見られない児にくらべて有意に低かった。低出生体重児は、NBAS のクラスター値では有意差がみられなかったが、母親が感じる反応性の高さはより低く感じていた。

1 か月後、10 か月、1 歳半の時点でフォローアップのデータを収集した。出産直後のデータとの比較では各尺度得点との有意差は見られなかったが、母親の育児への自信のなさは、子どもの反応性とより関連をしていた。次に、子どもの要因と母親のメンタルヘルスの関連をより詳細に検討するため EPDS 陽性者に焦点をあてて検討を行った。産後 1 か月での EPDS 高得点者の中には、子どもの未熟性が影響を与えていた事例と、母親自身の妊娠前からの不安定さが影響を与えていた事例が存在していた。また精神疾患既往があり、EPDS 高得点であった母親の子どもは生後 1 か月の時点で、活動性が少ない傾向が認められた。ただし人数も少なく統計的な分析はできていないため、今後症例数をふやすことで詳細な分析をおこなっていく必要があると考えられる。

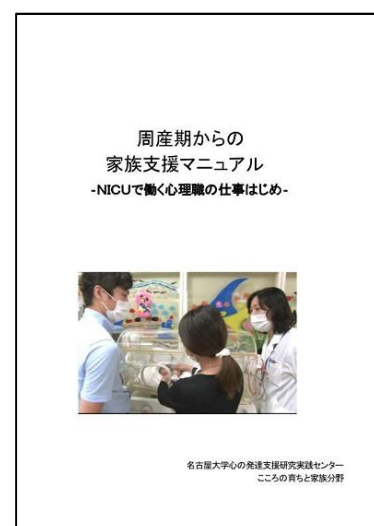
現在産婦検診で EPDS が導入されているが、実施にあたっては、産婦の不安を受け止めるとともに、子どもの自己調整や反応性のアセスメントも行うことで、赤ちゃんとのかかわりに焦点を当てた介入を検討する必要があると考えられた。

(2) 周産期医療における心理職の活動について検討を行い、周産期医療の現場でのこころのケアには、ポジティブな存在としての“いのち”との出会いを支える 両方の思いを抱えたまま、子どもと“いる Being” することのできる場の保証する 一緒に赤ちゃんを見つめることで、赤ちゃんの行動や反応の読み取りを支えていくことが基本となること、特別な支援を提供するのではなく、当たり前のケアの一つとして、できるだけ侵襲的にならないように、親と子のタイミングにあわせて介入し、場合によっては後方支援に回るなど場をケア

する役割を担うことが重要であることを示した。この結果を踏まえて、心理職の活動や場への支援の在り方についてNICUが設置されている周産期母子医療センターを対象に全国調査を行った。145施設から回答が得られNICUの70%以上で心理職が活動している一方、専属は2割にとどまっていることが明らかになった。NICUでの心理職の活動のあり方は、NICU専属かどうかによって異なっており、他科所属の場合、依頼制が多く、関連科に所属している場合、日常的にNICUで活動をしている割合が多かった。NICUで活動する心理職の約3割が、産科、NICU、退院後のフォローアップと長期的なかかわりで支援を行っており、NICU入院前から退院後まで一貫したかかわりを行っていた。スタッフとの情報共有については、多くの心理職がカンファレンスに参加している一方で、日常的なコミュニケーションをとることの難しさが指摘されていた。地位や雇用の確保とともに、周産期医療に関連する専門的な知識を有している心理職の養成体制の整備が望まれた。

また、NBOの日本における活用可能性について、正期産児、NICU入院児それぞれ事例を提示し、検討を行った。その結果、NBOの実施は、日本においても家族が目目の赤ちゃんに出会うことを支え、赤ちゃん自身のメッセージをそのまま受け取ることを可能にすることが示唆された。NBOを通して、赤ちゃんが生きる力・育つ力・反応する力を持った存在として出会いなおすことは、赤ちゃんの力を改めて信じることにつながると考えられた。NBOは赤ちゃんにとっても、家族にとっても侵襲性が低い介入方法の一つであり、今後、ハイリスク児の家族支援や、養育支援訪問などの新生児期の家族と赤ちゃんの関係性を支えるツールの一つとして、NBOを活用していくことが期待される。

(3)はじめて周産期医療領域で活動する心理職は、特定の枠組みを持たない中で、心理支援を求めてきた人にかかわるといった形態をとらないこと、非日常的な面接室の場で個別の面接をするのではなく、目の前にいる赤ちゃんに会うことから支援が始まること、スタッフの一人として多職種と連携をとりながら活動することに難しさを感じやすいことが明らかになった。研究～3の成果をもとに、研修マニュアル作成委員会を立ち上げ、周産期編、妊娠期編の周産期で活動をしはじめたばかりの心理職向けの研修マニュアルを作成した。今後このマニュアルをもとに、研修を企画・運営をおこなっていく。



5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 福岡明日香・永田雅子	4. 巻 58 (4)
2. 論文標題 修正1歳半の極低出生体重児と母親の相互作用	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 小児の精神と神経	6. 最初と最後の頁 303-311
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田雅子	4. 巻 31 (1)
2. 論文標題 赤ちゃんを観察することで親と子の出会いを支援する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本新生児成育医学会雑誌	6. 最初と最後の頁 48-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田雅子	4. 巻 48 (9)
2. 論文標題 母子関係：予後に影響する親子関係、愛着形成について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 周産期医学	6. 最初と最後の頁 1089-1093
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田雅子・浦田有香	4. 巻 27 (2)
2. 論文標題 新生児行動観察 (NBO) を用いた親子の関係性支援	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本乳幼児医学心理学会	6. 最初と最後の頁 87-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浦田有香・永田雅子	4. 巻 65
2. 論文標題 NICUに入院する新生児とその家族の支援方法としての 新生児行動観察 (NBO) の活用性についての検討 新生児とその家族への支援に関するレビューと今後の展望	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 名古屋大学教育発達科学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 79-90
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田雅子	4. 巻 30 (1)
2. 論文標題 NICUにおける多職種・他機関連携の実際と課題 全国調査の結果から -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本新生児成育医学会	6. 最初と最後の頁 91-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田雅子	4. 巻 198 (3)
2. 論文標題 周産期から新生児期の愛着形成の支援	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 こころの科学/日本評論社	6. 最初と最後の頁 51-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田雅子	4. 巻 28
2. 論文標題 乳児期の社会的支援の実際	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 そだちの科学	6. 最初と最後の頁 16-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田雅子	4. 巻 36(8)
2. 論文標題 産婦健診をよりよい支援につなげるために EPDSの活用にむけて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ペリネイタルケア	6. 最初と最後の頁 810-814
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田雅子	4. 巻 2(1)
2. 論文標題 周産期医療の「場」を支援する 心理的ケアを担う専門スタッフの役割	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本周産期メンタルヘルス学会誌	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田雅子	4. 巻 28(1)
2. 論文標題 新生児期～乳幼児期早期の親子関係を支援をすることの意義と役割	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本乳幼児医学・心理学研究	6. 最初と最後の頁 19-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田雅子	4. 巻 4
2. 論文標題 親と子の出会いに影響をあたえるものとは？周産期医療の中でできること/できないこと	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 近畿周産期精神保健研究会誌	6. 最初と最後の頁 15-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 永田雅子	4. 巻 49 (12)
2. 論文標題 新生児期からのコミュニケーションによる愛着形成と発達予後	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 周産期医学	6. 最初と最後の頁 1643-1646
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 永田雅子
2. 発表標題 赤ちゃんを観察することで親と子の出会いを支援する NBAS からNB0 への発展とその可能性
3. 学会等名 第63回日本新生児成育医学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 永田雅子
2. 発表標題 新生児期～乳幼児期早期の親子関係を 支援をすることの意義と役割
3. 学会等名 第28回乳幼児医学心理学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 永田雅子
2. 発表標題 周産期からのこころのケア 臨床心理士の専門性とその役割とは
3. 学会等名 第37回日本心理臨床学会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 永田雅子
2. 発表標題 リスクを抱えた赤ちゃんと家族の出会いを支える -周産期精神保健の歩みとこれから-
3. 学会等名 第59回日本児童青年精神医学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Tsuruta Yuko, Nagata Masako
2. 発表標題 Discussion on interaction between depressive mother and her infant -Through longitudinal observation over six months after childbirth
3. 学会等名 第16回世界乳幼児精神保健学会（WAIMH）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福岡明日香・永田雅子
2. 発表標題 修正1歳半の極低出生体重児と母親の相互作用
3. 学会等名 第39回ハイリスク児フォローアップ研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 永田雅子
2. 発表標題 出産後の母親のメンタルヘルスと子どもの要因の検討 産婦健診でのEPDSの導入をうけて -
3. 学会等名 第27回日本乳幼児医学心理学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 永田雅子
2. 発表標題 今，社会の変化の中で私たちにできることは？
3. 学会等名 第3回日本周産期精神保健研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 永田雅子
2. 発表標題 超低出生体重児と家族の育ちとレジリエンス
3. 学会等名 第62回日本新生児成育医学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 永田雅子
2. 発表標題 周産期医療領域における臨床心理士の活動 多職種の中での協働の在り方をめぐって
3. 学会等名 日本心理臨床学会第35回秋季大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 永田雅子
2. 発表標題 赤ちゃんとお母さんを支える -周産期～乳幼児期の家族支援
3. 学会等名 第5回日本タッチケア学会（招待講演）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 永田雅子
2. 発表標題 親になるということ 心のゆらぎと向き合う
3. 学会等名 第15回日本生殖心理学会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 永田雅子
2. 発表標題 周産期からの子育て支援
3. 学会等名 第122回日本小児精神神経学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 永田雅子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 173
3. 書名 新版周産期のこころのケア-親と子の出会いとメンタルヘルス	

1. 著者名 永田雅子編著	4. 発行年 2016年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 257
3. 書名 妊娠・出産・子育てをめぐるこころのケア	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----